

定食屋「ひがわり」 第1 話 開店祝

神江 京

その日、オフィス街の片隅に、ひっそりと一軒の定食屋が店を開けた。

表通りに面した華やかなオフィスビルの並びではなく、奥まった裏道にごちゃごちゃと雑居ビルが集まっている一郭だ。

こんな場所に、こんな建物が残っているとは……と誰もが驚くような古びた住居付き店舗を、居抜きで買ったのやら、借りたのやら。

いずれにせよ、ひっそりした佇まいに相応しく、二つだけ並んだ質素な花輪がなかったら、とても「本日開店」の店には見えないな、と今日子は思った。

今日子は、表通りのオフィスビルの一階に店を構えるカフェでアルバイトをしているフリーターだ。

朝は出勤前のモーニングを、昼時は時間に追われてのランチを、アフターファイブはケーキセットや軽いお酒を楽しむOLたちに人気の店で、フルタイムでシフトに入ったときなど、一日中、気を抜く暇がないほど忙しかった。

それでも、ランチタイムとアフターファイブとの間に、ぽっかりと時間が空いて、きちんと休憩を取れる今日のような日が、たまにはある。そんなとき、普段は歩かないような裏道に入りこみ、ちょっとした探検気分を味わうのが、今日子のささやかな趣味のひとつだった。

店にいれば、社員割引で安くカフェ飯を食べられたりするけれど、時間があるときぐらいは、よその店で食事をして気分転換したいな、と思う。

そんな今日子が、この日に気を引かれたのが、開店したばかりらしい「定食屋『ひがわり』」だったというわけだ。

「『ひがわり』って、なんか変わった名前だよな」

今日子は口のなかで呟いて、クスッと笑った。

「まさか、メニューが日替わり定食だけってことはないと思うけど」

今どき珍しいアルミサッシの引き戸をからからと開け、今日子は店の中に足を踏み入れた。

細長い店の右側にカウンターが伸び、左側にはデコラの四人掛けテーブルが二卓。カウンターとテーブル席の間が、細い通路になっていて、奥のほうに階段が見える。二階の住居部分に繋がる階段なのだろう。

定食屋と云っているわりに、おかずを並べたガラスケースや、セルフサービスのお茶を置いた台もない。

テーブルがデコラでなかったら、定食屋というより、まるで小料理屋だ。

「いらっしゃいませ」

きょろきょろと店内を見回す今日子に、カウンターの向こう側から穏やかな声がかかった。

長い髪を一本の三つ編みにして背中に流した女性が、笑顔を見せている。丸い眼鏡をかけた優しい雰囲気的女性だ。

「あ、あの……」

『こって定食屋さんなんですよね?』と確認しかけた今日子の心を読んだかのように、女性はうなずいた。

「おひとりでしたら、カウンター席へお願いします。

本日の定食は、鰯の西京焼きに蒟蒻草の辛子味噌和え、根菜の煮物に豆腐とエノキの清し汁、ご飯は五穀米になってます。

開店記念価格として五百円で提供させていただいてますので、是非どうぞ」

「安っ！」

思わず本音が口を突いて出てしまった恥ずかしさを誤魔化したくて、今日子は女性の言うがままに、カウンターの端の席に、ちょこんと腰掛けた。

あらためて、カウンターの上を見回す。

醤油や塩、胡椒などの調味料一式が乗った小さなトレイに爪楊枝入れ、木箸のたくさん入った箸箱などが並んでいた。割り箸を使っていないのは、環境に配慮してのことだろう。

「お茶とおしぼり、熱いのと冷たいの、どちらにしましょうか？」

いつの間にか、カウンターから出てきていた女性が尋ねてくれる。

「あ、あの……冷たいお茶と熱いおしぼりを」

今日子は反射的に、正直な希望を口にした。まさか、そんなことを尋かれるとは思っていなかったのだ。

どうも、この店に入ってから調子が狂っている。

「どうぞ」

と、差し出された熱々のおしぼりを受け取るのと同時に、カウンターの内側から辛子味噌和えと煮物の小鉢が出てきた。

そのときになって初めて気づいたのだが、カウンターの内側に、ちょっと小柄な男性がいて、その人物がすべての調理を引き受けているらしい。

なるほど、店が小体になるわけだ。

辛子味噌のツンと来すぎない程度に食欲をそそる香りと、人参や牛蒡、蓮根など、様々な根菜が盛りつけられた彩りの良さが、今日子の気持ちを引き立てる。

「そういえば——」箸を取りながら、今日子は尋ねてみた。「このお店、日替わり定食以外のメニューって無いんですか？」

「ありません」カウンター内にいた男性が、無愛想に応えた。「今日、いちばん美味しく食べられそうなものしか仕入れないので」

「そ、そうなんですか」

今日子は、自分がとんでもなくバカバカしい質問をしてしまった気になって、急いで辛子味噌和えをつまんだ。

口に入れる。

「……！ 美味しい！ 味つけもだけど、蒟蒻草がすっごく！」

途端に、無愛想だった男性の頬に微かな紅色が浮かんだ。

「ありがとうございます」どうやら照れてしまったらしい男性に代わって、眼鏡の女性が礼を言った。「素材の味が判っていただけると、やっぱり嬉しいですね」

この分なら根菜のほうも美味しいに違いない、と今日子が箸をのぼしたとき、二人連れのサラリーマンが店に入ってきた。

眼鏡の女性の案内も待たずに、四人掛けの席にどっかりと座り、きょろきょろと周囲を見回している。

「ちょっと、メニューとか無いの？」

近づいていった眼鏡の女性に、一人が尋ねた。

「献立は、日替わり定食のみとなっております。よろしければ、お試しください」

不躰な問いにも、女性は丁寧に応えた。

「何だよ、それ。ピンボーくせえ」客の一人が、吐き捨てるように言った。「こんな裏道に新しくできるような店じゃ、それも仕方ないか」

「せっかく新しい店だと思って入ってやったのに。なんだよ、エイプリルフールの企画店か何かか？」

もう一人の客の言葉に、今日子はハタと気がついた。

確かに、今日は4月1日だ。

だが、彼女が口にしている煮染めた牛蒡の美味しさは、どう考えても嘘なんかじゃない。

「そういうわけじゃないんですよ」眼鏡の女性は、優しい笑顔を崩さなかった。「うちの献立は、毎日一種類の定食のみなんです。だから、お店の名前も『ひがわり』ってつけたんです」

「ふ～ん……で、今日の定食は？」

興味を持ったらしいサラリーマンの質問に、女性は先ほど今日子に伝えたのと同じ献立を答えた。ついでに、お茶とおしぼりの好みを尋くのも忘れない。

「鯖かぁ……俺、好きなんだよな」さっき『ピンボーくさい』などと言ったのを忘れたかのよう、一人が言った。「じゃ、それ二つ」

「ありがとうございます。定食ふたつ、入ります」

「ん」

カウンター内の男性は短く応えると、今日子の前に、よだれが垂れそうな色に焼きあがった鯖の皿を置いた。同時に、女性が五穀米のご飯と清し汁の椀を運んでくる。

「ご飯とお汁は、おかわり自由になってますから」

にっこり笑って告げると、取って返して、サラリーマンたちに、お茶とおしぼりを出している。

鯖の西京焼きは、今まで今日子が食べたことのない美味しさで、食べるにつれて無くなっていくのが惜しいほどだ。ちびちびと鯖の身を剥がし、合間に煮物を食べていると、また一人、客が入ってきてカウンターに座った。

「よう」

気安くカウンターの中に声をかけたところを見ると、中の男性——おそらく店主だろう——の知り合いのようだ。

「いらっしゃいませ」

眼鏡の女性が、冷たいお茶と熱いおしぼりを新たな客に差し出す。

「さすがに判ってるなあ」

客は嬉しそうに、おしぼりを受け取った。

「田中、そいつには構わなくていい」カウンターの中にいる男性——店主が、ぼそりと言った。

「テーブルのお客様に、これ」

「はいはい」

女性は、辛子味噌和えと煮物の小鉢をテーブル席へ運んでいった。

「おまえさあ」構わなくていい、と言われたことなど、まったく気にする様子もなく、カウンターの客は女性の背中に向けて顎をしゃくった。「いいかげん、名字で呼ぶの、やめたら？」

「田中は田中だ」

そう言うと、店主は客の前に、辛子味噌和えを山盛りにした鉢をどんと置いた。鉢の大きさからして、今日子に出された物の二倍ちかくある。今日子のお腹だったら、それだけで、いっぱいになってしまいそうな量だ。

「お、蒟蒻草かあ」

客は嬉しそうに食べ始める。

続けて店主は、どんぶり鉢に山盛りにした根菜の煮物を、でんと置いた。

「す、すごい……」

今日子は、箸でつまんだ鱈の端っこを口に入れるのも忘れ、目をぱちくりさせた。

「あ、ごめん、びっくりするよね」嬉しそうに、どんぶり鉢を抱え込んだ客が、頭を掻いた。

「俺、大食いだからさ」

「並みの大食いじゃないけどな」店主が、ため息をつく。「おまえ、昼どきに来るの、禁止。ほかのお客さんが食欲なくしそうだ」

「そんなこと、ないですよ！」今日子は慌てて首を横に振った。「そりゃ、ちょっと驚きましたけど、美味しいものをたくさん食べられるのって羨ましいです。私、食が細いほうだから……」

「あ〜、そりゃ人生の何分の一かを損してるなあ」男性客は、本気でそう思っているという表情で、しみじみと首を振った。「ここの店なら、我儘を言えばイイよ。これは好きだから多めに、とか、こっちは今イチだから少な目に、とか。人間、一生に食べられるメシの量は決まってるから、好きなように、好きなものを食べなきゃね」

「田中、これ」

店主は男性客の演説をまるっきり無視して、テーブル席の客に持っていく鱈の皿を出した。

「お待たせしました」

女性は鱈を運び、ご飯と汁物をテーブル席に出した。

それから、巨大な鉢にご飯を盛りつけ、すり鉢のような椀に清し汁を注いで、カウンターに運んでくる。

「俊也のことだから、これぐらいないと足りないでしょ」

俊也、と呼ばれた男性客は嬉しそうに、こくこくとうなずくと早速、ご飯の鉢を取り上げた。この量になると、五穀米の香ばしい匂いが周囲一帯に広がっていく感じだ。

「ほら」

店主が、鯖を何切れか無造作に並べた皿を俊也の前に置く。

「一切れ、食べる？」

俊也に、いきなりそう尋かれ、今日子は目を白黒させた。

「いえ、私はこれだけで――」

遠慮気味に答える今日子の皿に、俊也は結構おおきな鯖をぽいと乗せてよこした。

「でも、その一切れ、すごく大事そうに食べてるから。気に入ったんだよね、きっと」

「それは……はい」今日子は赤くなって下を向いた。「なんか食べちゃうのが惜しくて」

「最高の褒め言葉だよなあ、春田」

俊也が笑った。

店主は無言のまま、頬を紅くしている。

「おーい、ごはんとお汁、おかわり」

テーブル席から声がかかり、女性が「は〜い」と明るく返事をした。その間に、新しく客が入ってくる。

「けっこう繁盛しそうだなあ」俊也が嬉しそうに言った。「ね、君もそう思うだろ？」

「はい」俊也が突然、話を振ってくるのに慣れてきた今日子は、落ち着いてうなずいた。「最初、日替わり定食しかメニューがないって聞いたときは驚いたんですけど……これなら、納得できます。リピーターになっちゃいそう」

「なってやって、なってやって」俊也は我が事のように、嬉しそうだ。「このへんで働いてるの？ だったら、お昼は、この店で決まり！ ね？」

「でも、彼女、表通りのカフェのウェイトレスさんよ」新しい客のための小鉢を取りに来た女性が微笑んだ。「そんなに、いつもいつも定食なんて食べてられないわよね」

「私のこと、ご存じだったんですか？」

今日子は箸を止めて尋ねた。

「ここに店を出す前に、まわりの食べ物屋は一とおり回ったから」店主が言った。「お客さんが働いてるところも見ました。田中が『あれ出来るようになりたい』って、すごく感心してたから、憶えてたんです」

「ちょ、ちょっと、春田くん、バラさないでよ」

小鉢を運んだ女性が、瞬速の勢いで戻ってきて店主を睨みつけた。

「あ、あの……私、何か、したんでしょうか……？」

今日子は慌てて尋ねる。

「違うの違うの、あなたは何も悪くないですよ」女性は真っ赤になって手を振った。「私がお手本、あなたをお手本にしたいなって、勝手に思ったんです」

「お手本って……」

今日子は本気で考え込んでしまった。

店に入ってしまうと、仕事をするのに精いっぱい、よほど印象に残る人や、毎日のように通ってくれる人以外は、お客様の顔など憶えてはいない。実際、最初にここへ入ってきたときも、春田という名前らしい店主や田中さんという女性の顔に見覚えは無かった。

そこへまた、新しい客が入ってくる。裏通りとは云え、オフィス街の中だから、新規オープンの店ともなると、興味を持つ人が多いのだろう。もう一つ空いていたテーブル席が埋まり、カウンターにも客が座って、女性は接客に忙しくなった。

その代わりにように、手を動かしながら、店主が独り言のように話します。

「初めて、あなたの店にお邪魔したときが、ちょうど昼休みが終わるぐらいの頃合いです」

清し汁に浮いた、適度な固さの豆腐を味わいながら、今日子はうなずいた。ちゃんと返事をしないと失礼だと判ってはいたが、あまりの美味しさに、椀を口から離すことができなかったのだ。

「時間が時間だけに、あちこちのテーブルに食器やら何やらが残ってて、すぐに席に着ける状況じゃなかった」

「……すみません」ようやく、口の中の豆腐とエノキを飲みこんで、今日子は謝った。「あの時間帯は、なかなか早く片づけも出来なくて。とにかく、お客様をお待たせしないように、しているつもりなんですけれど」

「いや、そんなに待たされてはいけません」新しい客のための小鉢を素早くカウンターに並べながら、店主は応えた。「田中が感心したのは、そこなんだから。あなたは、俺たちに向かって、『少々お待ちくださいね』」

と言ってから、窓際のテーブルをササッと片づけてくれた。何枚ものプレートはもちろん、グラスやカップもたくさんあったのに、ほとんど音も立てずに」

「へえ～……すごい」

本気で感心した様子で目を丸くしたのは、俊也だ。

話を聞いている間も手と口は動いていたらしく、巨大な鉢にてんこ盛りだったご飯が、半分以上なくなっている。

「手近に片づけやすい席があったのに、店が空いてきてるからって理由で、眺めの良い場所を空けてくれたこと、片づけの手際が恐ろしく良かったこと——それが田中を感心させた」

「お客様のことを考えて動いてらっしゃるんだなあって、そう思ったんですよ」鱈の皿を取りに来た田中が、店主の言葉に口を挟む。「実はそれまで、自信がなかったんです。春田くんのお店を手伝うこと。どんなふうにしたら良いんだろう、どうやったら春田くんの役に立つんだろうって、頭でばかり考えちゃって」

今日子は、顔を真っ赤にして田中の言葉を聞いていた。

正直なところ、戦場のような昼休みどき、一組一組のお客のことなど、ちゃんと考えてはいない。ほとんど脊髓反射でテーブルを片づけ、新しい客を案内しているだけなのだ。

なのに、そんな今日子を見て、田中は感心してくれたのだと云う。

「お店にいらしたお客様が望むサービスを、できるだけしてさしあげられたら、それで良いのかもしれない—あなたの接客を見て、なんかスーッと肩の力が抜けたんです」

鱈の皿を配膳しおえて戻ってきた田中が、照れくさそうに微笑んだ。

「う〜ん……いい話じゃないか！」

大きくうなずいている俊也の前に置かれた鉢の中には、飯も汁も、もうほとんど残っていない。

「おかわり……いるか？」

店主が尋ねる。

「うん、さっきの半分ぐらいね」

俊也が、ものすごくイイ笑顔でそう応え、苦笑した田中が新しい鉢を二つ運んできた。

「鱈は、そんなにサービスできないからな。煮物で我慢してくれ」

そう言うと、店主はまたも山盛りの根菜を俊也の前に置いた。

「あ、あの……この鱈、お返ししたほうが……」

今日子は、手をつけかねていた鱈を、皿ごと俊也のほうにさしだした。

「いいのいいの、それは君が食べてやって。そのほうが春田も喜ぶよ」俊也は、ご飯の鉢を抱えて言った。「君、今日この店に入ったのは偶然なんだろう？ そのことがまず、春田たちには嬉しいだろうし、そのうえ、お代わりが欲しいなって思うぐらい、春田の料理を気に入ってくれた。彼らにとって、そんなに嬉しいことってないだろうからね。とにかく美味しく食べてやってよ。開店祝いだと思ってさ」

「はい……いただきます！」

今日子は、こっくりうなずくと、鱈を口に入れた。ゆっくりと噛みしめると、魚の味に西京味噌の絶妙な味が合わさって、つつい至福の表情になってしまう。

「じゃ、俺は行くからな」あつという間に、お代わりを食べ終えた俊也はカウンターの上に、ぽんと千円札を放りだして言った。「頑張れよ、春田、田中も」

「ありがとう、俊也」

店主がぼそっと礼を言い、

「あ、俊也、おつり！」

と言いかけた田中の言葉にヒラヒラと手を振って、俊也は店を出て行ってしまった。あとには、飯粒ひとつ、汁一滴も残さずに食べつくされた食器が残っている。

「ごめんなさいね、びっくりされたでしょ」田中が、俊也の食器を手際よく片づけながら、今日子に向かって苦笑した。「でも、あなたが私のお手本だっていうのは本当。あなたが今日、このお店に来てくれたこと、本当に嬉しいです」

今日子は無言のまま、ぺこりと頭を下げた。何故なら、口のなかは美味しい鯖とご飯でいっぱいになっていたからだ。

「よかったら、時々はいらしてくださいね。あなたのお店ほど、オシャレじゃないけど」

田中の言葉に、今日子は首を横に振った。

「ううん、充分オシャレです。こんなに美味しいものを、さりげなく食べさせてくださるんですもん。私、また来ます」

皿の上のものを綺麗に食べ終えた今日子は、丁寧に手を合わせて「ごちそうさま」と言った。

「おそまつさまでした」

店主が律儀に言葉を返す。

「あの……本当に五百円でいいんですか？」

財布を開きかけた今日子が、おそるおそる尋ねた。

「ええ、もちろん。俊也は—まあ、大盛り代金だから」

田中が笑顔で応え、今日子はもう一度「ごちそうさまでした」と言って、五百円玉をカウンターに置いた。

「ありがとうございます。またいらしてくださいね」

「はい、また来ます—えと、田中、さん？」

「田中ひろえ、です」田中は三つ編みを揺らして微笑んだ。「あの、あなたのお名前も、うかがっていいですか？」

「今日子です。加納今日子。よろしければ、うちのカフェにもまた—」

「ええ、お邪魔させてもらいます。お昼どきは難しいですけど」

そう言って、田中は「ありがとうございました」と、頭を下げた。

今日子は軽い会釈を返して店を出る。その今日子とすれ違うように、またサラリーマンのグループが入っていった。

「なんだか……毎日の楽しみが増えた気分かも」

そう呟くと、今日子は、ティータイムの戦場を迎える自分の職場へと戻っていったのだった。